

2020年11月30日

明治学院大学 国際センター

### 学生の海外派遣の成果の検証

本学の学生の海外派遣事業について、2019年度「大学留学プログラム」に関して以下の通り報告いたします。

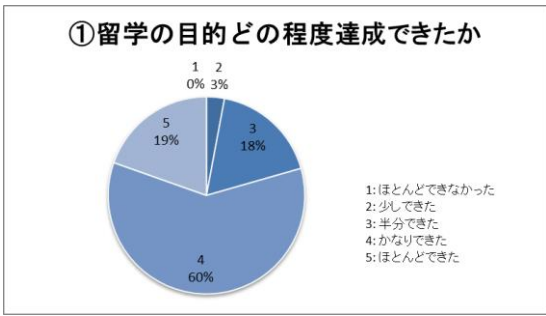
- ◇対象学生：2019年度秋学期より大学留学プログラム（全学部学科生が参加可能な全学の海外留学プログラム）に参加して長期留学を実施した学生および協定外留学の学生
- ◇派遣人数：110名
- ◇派遣期間：2019年度秋学期より1学期～2学期
- ◇派遣目的：長期認定留学として本学の学業の延長上にある留学
- ◇活動内容：大学留学プログラムは以下の4種類からなる。
  - 交換留学、派遣留学：協定大学での学習
  - グローバルキャリアインターンシップ：協定大学での学習およびホスピタリティ企業でのインターンシップ（就業）活動
  - 国際貢献インターンシップ：国際協力に関わる海外国連事務所、NPO、NGOなどでのインターンシップ（就業）活動

以上の学生に対し、「留学計画ワークシート」を用いて、10個の項目について留学前後の自己評価を学生に課し、その結果を回収しました。回答の回収は2020年5月～10月にかけて行い、有効回答数は102件でした。以下に回収したワークシートの分析を記載します。

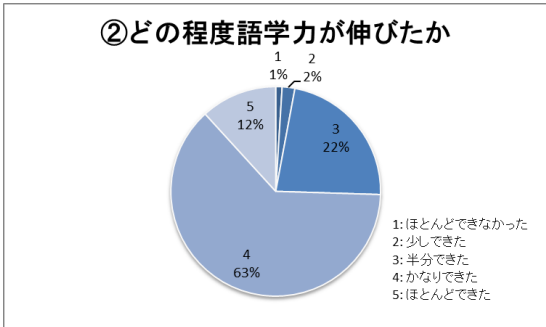
#### 【留学計画ワークシートの回答分析】

留学後に回答を求めている、①留学の目的が達成できたか、②語学力を伸ばすことができたか、③留学中の学習内容を明学での学習の理解に活かすことができたかという3つの設問については、各設問とも「ほとんどできた」、「かなりできた」、「半分以上できた」という肯定的な回答が目立った。

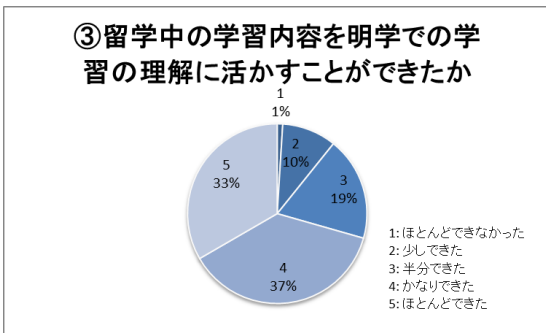
中でも設問①と②には、97%の学生が上の3つの選択肢のどれかを回答している。設問①については、「かなりできた」を選んだ学生が60%と一番多く、「ほとんどできた」が19%、「半分以上できた」が18%とほぼ同数となった。設問②についても「かなりできた」を選ん



だ学生が 63%と一番多く、「ほとんどできた」が 12%、「半分以上できた」が 22%となった。



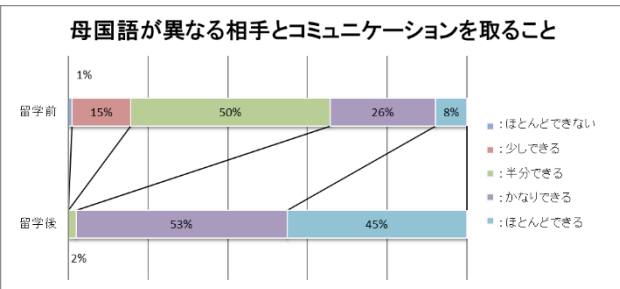
設問③は、「かなりできた」を選んだ学生が 37%、「ほとんどできた」が 33%、「半分以上できた」を選んだ学生が 19%となり、設問①②の回答と比べて「ほとんどできた」を選択した学生の割合が高い結果となった。反面、この3つの選択肢を選んだ学生の合計は 89%にとどまり、「少しできた」という選択肢を回答した学生も 10%、「ほとんどできなかった」という選択肢を回答した学生も 1%いた。



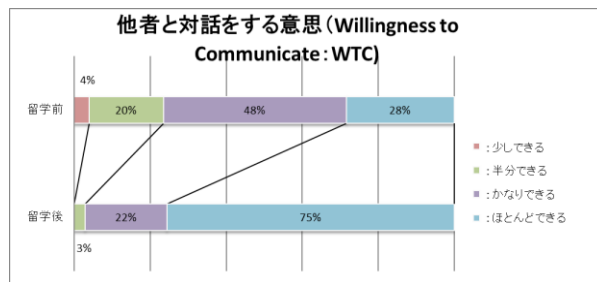
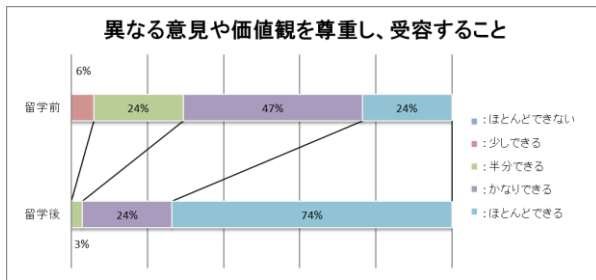
今回の調査対象者は 2019 年度秋学期に留学に出発した学生で、ほぼ全員が留学途中で新型コロナウイルスによる感染症の流行に伴う緊急事態に遭遇している。ごく一部を除いて留学期間を短縮して緊急帰国し、留学先での勉強を中断せざるを得なかった学生が多くいたことが、設問③で否定的な回答が見られた原因の一つと考える。帰国後に留学先のオンライン授業を受講することを本学が許可したため、留学先での履修科目を学期終了まで受講できた学生と、帰国により受講を中止した

学生の間で回答に差が出た可能性が高い。

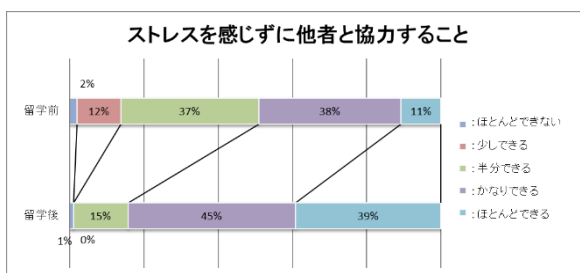
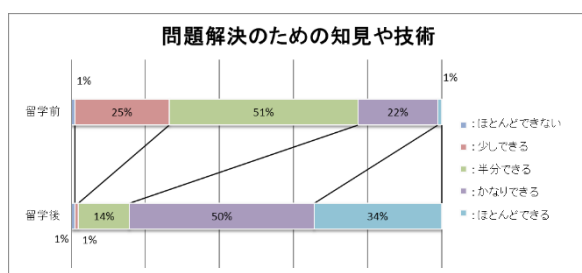
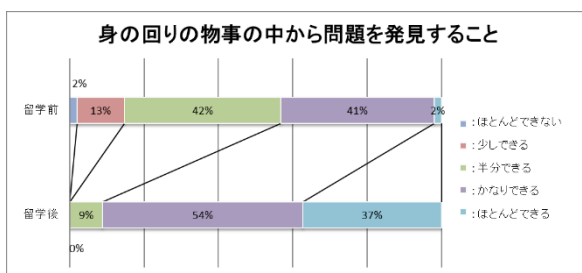
留学前と留学後に回答を求めている設問 10 問の中で、一番達成度が高かった設問は『母国語が異なる相手とコミュニケーションを取ること』で、「ほとんどできる」、「かなりできる」を選択した学生が留学前は 34%だったのが、留学後には 98%にまで上昇した。学生ごとに留学前後の回答を比べて差を集計した棒グラフでは、留学前と同じ回答を選択した学生や留学前より低い評価の回答を選択した学生は 100 名中 13 名となり、他の設問に比べて少数となった。これは留学中に学生自身の語学力が伸びたこと、母国語が異なる相手と



コミュニケーションを取らざるを得ない留学先の環境により、実践力が付き自信につながったことが大きいと考察する。



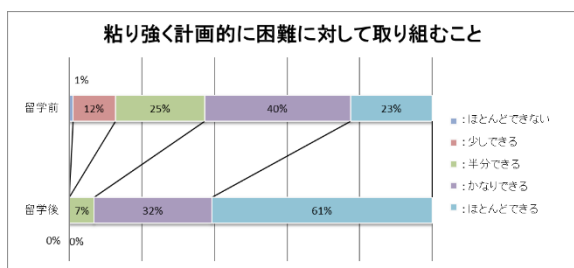
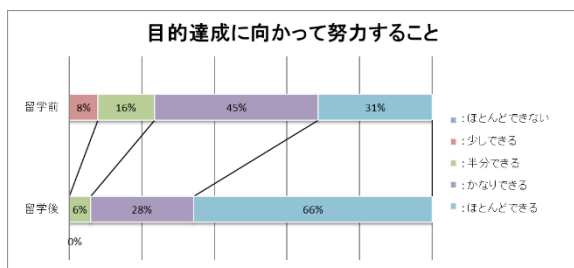
せていることが期待される項目であることが影響していると考えられる。結果として、留学前後を比較すると全体的に穏やかな上昇となったが、内訳を確認すると両設問とも留学前に「ほとんどできる」を選択した学生が20%台だったのが、留学後は70%台まで上昇しており、大幅な成長がみられる。



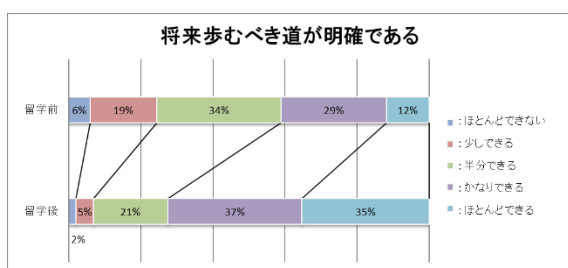
『異なる意見や価値観を尊重し、受容すること』、『他者と対話をする意思 (Willingness to communicate : WTC)』の2つの設問については、留学後に「ほとんどできる」、「かなりできる」を選択した学生が『異なる意見や価値観を尊重し、受容すること』が98%、『他者と対話をする意思 (Willingness to communicate : WTC)』は97%と高水準であった。この2つの設問については留学前に「ほとんどできる」、「かなりできる」と回答した学生も70%台と高かった。留学を志す学生の資質として持ち合わせ

『身の回りの物事の中から問題を発見すること』という設問に関しては、留学前に「ほとんどできる」を選択した学生は2%と少なかったが、留学後には37%に上昇した。「ほとんどできる」、「かなりできる」を選択した学生も留学前の43%が91%にまで上昇している。この設問に関しては、留学前に「ほとんどできない」や「少しできる」といった否定的な回答をしている学生が15%いたが、留学後には0%となった。否定的な回答の学生が減る傾向は『問題解決のための知見や技術』、『ストレスを感じずに他者と協力すること』という設問に対する回答にも見られ、「ほとんどできない」や「少しできる」と回答する学生の割合が、前者では留学前が26%だったのが留学後には2%に、後者では留学前が14%だったのが留学後には1%に減少している。この3つの設問に関しては、留学前に「半分で

きる」と回答している学生の割合が比較的高いのが特徴で、『身の回りの物事の中から問題を発見すること』については42%、『問題解決のための知見や技術』には55%、『ストレスを感じずに他者と協力すること』には37%の学生が「半分できる」と回答している。留学後に「半分できる」と回答している学生の割合はそれぞれ9%、14%、15%と減少している。これは、これらの設問については留学前にはあまり意識することがなく生活していたが、留学によって新たに気が付いたり、意識せざるを得なかった概念である可能性が考えられる。



『粘り強く計画的に困難に対して取り組むこと』では37名と多かった。この調査に回答している学生のほとんどは大学留学プログラムという国際センターで主催している留学プログラムに出願している学生であり、その多くはプログラムごとの学内選考試験を通過し、留学先が求める条件を満たすことができた学生であるため、留学前の時点で「目標達成に向かって努力」し、「粘り強く計画的に」取り組んできていることが言える。

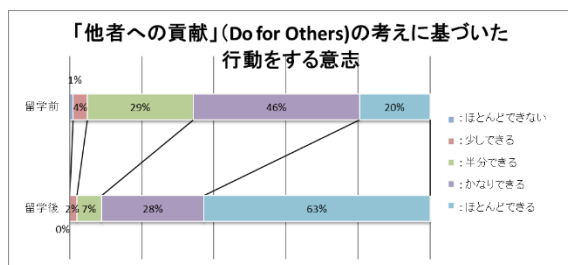


留学前と比較すると数値の上昇は見られるものの、回答にばらつきが見られたのが『将来歩むべき道が明確である』という設問である。この設問には留学前の回答で「ほとんどできる」または「かなりできる」を選んだ学生が41%、「ほとんどできない」や「少しできる」を選んだ学生は25%にのぼった。留学後の回答では「ほとんどできる」または「かなりできる」を選んだ学生が72%まで上昇した一方、「ほとんどできない」や「少しできる」を選んだ学生も7%おり、他の設問の回答のように0%に近づくほどの減少は見られなかった。留学前から具体的なキャリアプランを持っている学生もいる一方で、明確なプランを持っていない学生も多いことが明らかになった。学生ごとに留学前後の回答を比べて差を集計した棒グラフでは、留学前の回答より否定的な選択肢を回答した学生が11名おり、他の設問の回答とは異なる傾向となった。留学することで当初考えていた道とは違う道が

『目的達成に向かって努力すること』、『粘り強く計画的に困難に対して取り組むこと』という設問に対しては、留学前の回答で『目的達成に向かって努力すること』には76%、『粘り強く計画的に困難に対して取り組むこと』には63%の学生が「ほとんどできる」または「かなりできる」を選んでいる。

学生ごとに留学前後の回答を比べてその差を集計した棒グラフでは、『目的達成に向かって努力すること』に関しては留学前と後で同じ選択肢を回答している学生が102名中44名、『粘り強く計画的に困難に対して

見えてきたことによる影響のほか、新型コロナウイルスによる感染症の流行により世界的に景気が悪化したことで、学生が就職活動や将来に対する不安を抱きやすい状況に置かれていることが原因として考えられる。



『「他者への貢献」(Do for Others)の考えに基づいた行動をする意思』については、学生生活の中で本学の教育理念「Do for Others」に触れる機会が多い影響か、留学前の回答で「ほとんどできる」または「かなりできる」と回答した学生が66%に上った。

「半分できる」も合わせると95%に上る。留学後の回答では「ほとんどできる」または「かなりできる」を選んだ学生が91%、「半分できる」を合わせると98%に達した。

この留学計画ワークシートを導入する際に、学生の異文化間コミュニケーション能力、分析力、外国語能力、キャリアデザイン力、共生社会への貢献について留学前後の成長を測ることを想定し設問を設定した。調査結果を総合的に比較すると、異文化間コミュニケーション能力や分析力、外国語能力については顕著な伸びがみられた。共生社会への貢献については、留学経験に関わらず本学の学生の特徴として意識が高い傾向が見られたが、留学によってさらに成長する学生が多かった。キャリアデザイン力については、留学をきっかけにより明確なプランを持つことができた学生がいる一方で、迷いが生じる学生も見られ、個人差が大きい傾向となった。この点に関しては、出発前にキャリアを意識したイベントを開催したり、キャリアセンターに協力を依頼し出発前のオリエンテーションで学生に意識づけを行うなどの機会を提供し、今後改善を図りたい。

以上  
担当： 国際センター 国際交流課

## 成長(参加後-参加前)

